

三島町^{ひのはら}桧原を歩く

2022 年 11 月 4 日午後、雨傘をさして、赤坂憲雄さんらと 10 名ほどで三島町桧原を歩いた。集合場所は、春日神社前。桧原で生まれ育った鈴木隆さん(昭和 22 年生)に案内をお願いした。この神社は集落より 1 段高い段丘(第 5 段丘)にある。

神社は寛政 12 年(1800)に改築されていたが、昭和 40 年(1965)に現在の場所に移転している。古い宮のあった場所は、中世の山内氏の居館があった場所と推定され、その後背地の尾根が「桧野原駒鳴瀬丸山城」で遺構が現存している(『福島県の中世城館跡』1988 年 195 ページ)。

この中世領主の子孫が、近世会津藩の横田三友斎俊益で、祖先の供養碑を 2 基建立している。会津藩撰の『新編会津風土記』(1809)の桧原村の項に詳細が記されている。これは中世山内氏と近世会津藩(保科氏)をつなぐ記録となっており、2 基とも現存している。俊益については金山町生まれの栗城正義さんの著作『忠誠日本一』(歴史春秋社、2009 年)が詳述している。ただし本書は様々なことを収集しているため、史実とは異なる場所も散見されるから引用する場合には注意が必要である。俊益のことについては近世の記録に基づいており信頼できる。

春日神社境内にある横田俊益が建立した供養碑、飯豊山供養碑(1814)、16 基並ぶ石祠(権現社、熊野社、秋葉神、山王社、金比羅宮、天満天神、伊勢神宮、五稷神、雷神、山ノ神、御四天王、愛宕等)がある(『みしまの石祠と供養塔』1982 年)。この石祠類は本殿移転時に各所から集められたものを含むようである。また本殿外壁にはグミの木で作られた弓が奉納されていた。



春日神社に隣接し、観音堂がある。念仏供養塔(1745)、庚申塔(文化年間)などが確認できる。折紙による小さなツルがたくさん奉納されている。ここから、神社のある段丘から集落のある段丘に 1 段降りる旧道がある。そこを歩いて降りた。途中にコウゾの木があった。近世にはコウゾで紙漉きも行い、ウルシも栽培し木の実からロウを採取していた(『三島町歴史文化基本構想』2011 年、79 ページ)。薬用人参の栽培、柿の栽培も多い。村の中にはオオハッサク、ゴシヨガキ、ハチヤガキ、ミシラズガキなど多種の柿が見られる。干し柿にして販売したほか、他所から「柿もぎ(採取)」に来た人に販売したものだ、という。

この集落のある平地と坂道の境界に大きなカツラの樹木があり、そこが「水神(みずがみ)様」で、湧水があり、置き石、不動様石像が安置される。この湧水は飲料水・生活用水・水田の養水として利用された。

カツラの樹木は、隣接した薬師堂前にもあり、聖なる木として禁伐となっている。カツラの木は、奥会津では「コウノキ」という民俗呼称があり、この葉を乾燥させ抹香を作り仏壇の香として利用してきた。落葉の黄葉も甘い良い香りがしていた。



写真は桧原のカツラの木

『三島町史』(1968 年、432 ページから)によれば、只見川右岸の現在の集落のある河岸段丘の 4 段目にあたる場所からは縄文時代の土器や打製石斧(写真掲載)、敷石住居跡などが確認されている。また段丘 1 段目の馬場の平、5 段目の春日神社がある春日ノ原、上新田などからも縄文時代の土器・石器が出土している。これらは何れも『遺跡台帳』には掲載されていないが、縄文時代中期から晩期、弥生時代の遺跡がある、ということを示している。一方、只見川左岸の小和瀬遺跡は著名な縄文晩期の土偶を出土している。これは東京上野の国立博物館蔵である。『町史』の巻頭にその写真が掲載されている。24.7cm の大きさで胴部には大洞(おおぼら)式の特徴ある文様が付けられている。北海道アイヌの文様に通じる文様である。

2011 年 7 月末の新潟・福島豪雨で、只見川は増水となり桧原の居村の対岸に 2 軒ある小和瀬地区は被害を受けた。そのため築堤工事が行われた。

洪水後、ダムの水位が下がり、水没していた小和瀬遺跡も出現し三島町教育委員会により表面採集で縄文晩期の大洞式土器・独鈷石など石器等が確認されている。

築堤工事前の 2019 年に福島県文化振興財団による発掘調査が行われ報告書『小和瀬遺跡』が 2022 年 3 月に公刊されている。

これによると、縄文晩期の住居跡 1 棟、掘立柱建物 2 棟が確認され、弥生時代までの遺物が出土している。縄文晩期から弥生時代の出土土器の付着炭化物の放射性炭素年代測定により紀元前 540 年～ 150 年に小和瀬遺跡は存在したものと結論づけている。

いまから 2563 年前から 2173 年前にあたる。

また特筆すべきは、土器片にある種子等圧痕の分析で、アワ・サンショウ・ヒシ属・シソ属・コクゾウムシが確認された。特に縄文時代晩期のアワの確認は福島県内では最古となっている。コクゾウムシは穀類貯蔵に出現する昆虫であり、アワなどの栽培・貯蔵を示している。参考までに、会津の下郷町の瀧ノ入遺跡では弥生時代中期のイネとキビの圧痕が確認されている。小規模な植物の栽培が行われていたことは、出土した打製石斧やその使用痕でも類推できる。打製石斧は、現代農具の鍬(クワ)や鋤(スキ)に該当する。

2022 年 12 月 3 日、三島町名入の「山びこ」ホールで、「埋もれ木から読み解く沼沢火山大噴火 調査報告会」(IORI 倶楽部主催)が開催された。三島町大谷川で確認された埋木類が化学分析の結果、5500 年前の沼沢火山の噴火で埋没したものと結論づけられた。この樹種はケヤキ、ブナに加えてカツラが確認された。

5500 年前は縄文時代前期末～中期初頭にあたり、カツラの樹木が近接した森林にあった。カツラについて、会津学研究会で懇談した際に赤坂憲雄氏は「原生植生を神社は残している」ことが多いので、桧原のカツラの 2 本の巨木は、この台地(湿地)に古くからあったものを人々は残したのではないかと語られている。

私も、そのように思った。

(会津学研究会・菅家博昭)